

ハイモチ病激発農家群の実態と

パラチオン剤使用稲作についての諸問題

藤 畑 孝 正

(富 山 県 庁 農 産 課)

(1) ハイモチ病激発農家群の実態 昭和28年度はイモチ病が大発生したが、その年に富山県下27地区のイモチ病常発地の1300戸を対象にしてハイモチ病についての実態調査を行い普及上の問題点を引き出そうとした。調査結果の要点は次の通りである。

常発地農家の作付品種及びそれを取り入れた理由、或は激発品種については一般的傾向と似ているが、強いてあげれば過去においてレンゲ稲作として高位収穫をあげたものであるということである。

耕種的に激発を助長していると考えられる点は、レンゲを多くすき込んだこと、基肥が多過ぎたことの2点で、これらはいずれも40%以上を占めていた。ついで追肥が多すぎたり、用水が冷たかつたり、苗があまりよくないなどの点で、これらは20%台となっている。従つて施肥法の改善、健苗の育成などの耕種面における欠陥が大きな原因のようである。

稲作上最も力を入れ注意している本田作業は、中耕作業である。これについてはイネの生育状況を考えて適期作業を意図して実施しているものと考えられるが、しかし慣行に従うという面もあり、これがイネの過剰生長の原因になっているように考えられる。

肥料の種類と施肥量をどうきめるかについては、成分必要量を計算する農家が80%、自分で実施している者が82%もあるが、まだ土壌の生産条件の実態を把握する点に欠けている。無硫酸根肥料の施用については、普及員の助言によつて行うというのが45%を占めている。要するにレンゲと土壌的な結びつきについての考え方に問題があるようである。

防除技術については田干とレンゲの分解との関係に問題があるようで、田干をした方がよいという者のある反面、田干すると一層ひどくなるという回答もあるのは注目しなければならない。

薬剤防除についてはセレスン石灰の効果が最も大きい。しかし薬害や適期撒布についての指導が大切である。又薬剤の入手が間に合わず、撒布できなかつたと

ころもあるので、緊急防除ができるように農業の備蓄や農業団体への啓蒙について反省する必要がある。

(2) パラチオン剤使用稲作の実態 富山県下の32地区33部落の3000戸の農家を対象とし、パラチオン剤使用稲作について実態調査を行った。これは昭和28年度はパラチオン剤撒布田ほどイモチ病がひどかつたという声もあつたので実施したのであるが、その概要は次の通りである。

昭和27年にはテストケースとして300町歩にパラチオン剤を撒布したが、28年度には一躍2万町歩となつた。従来の農業技術中このような速度で普及した技術はないといつてよい。

1化期に重点的に使用したパラチオン剤の効果については約90%の農家はその効果を認めている。しかし昭和28年度に使用の多かつた部落では95.3%も使用したのに、昭和29年度の使用計画農家は88.4%と減少している。それに対して使用の少い部落では昭和28年は55.4%であるのに29年度の計画は76.7%と増加している。この原因がどこにあるかは今後の研究課題である。なお調査表によれば価格、取扱、指導面に関する意見もあるが、これらの中には収量によつて解決される面もあると思う。

ニカメイチュウによる被害については農家の認識が高く、技術水準も高い方である。被害については17~20%以上と認めている農家が多い。

パラチオン剤のニカメイチュウ駆除効果は驚異的であるが、最後の収量が高くなならないと批判の声が多くなる。農家の観察ではパラチオン剤をまくと草丈が高くなり、葉色がこくなり、倒伏する稲もかなりあつた。調査表によればパラチオンをまいたところイモチ病の発生が早かつたというのが25%あり、とくに黒泥土地帯や地力の高い湿地帯に高率でみられた。従つて耕種技術と関連させて総合的に考えなければならぬと思う。